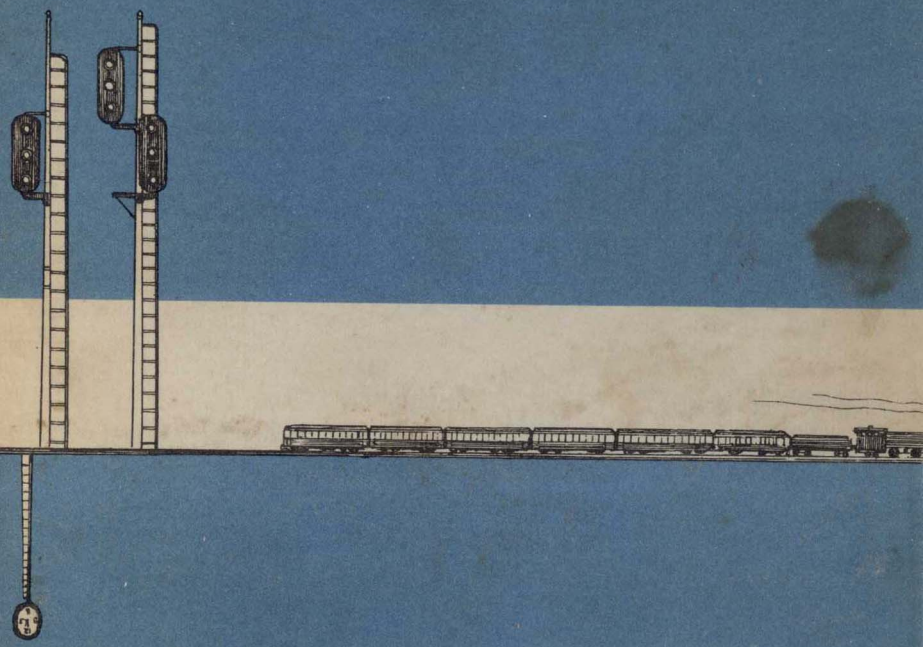
鉄道公安官

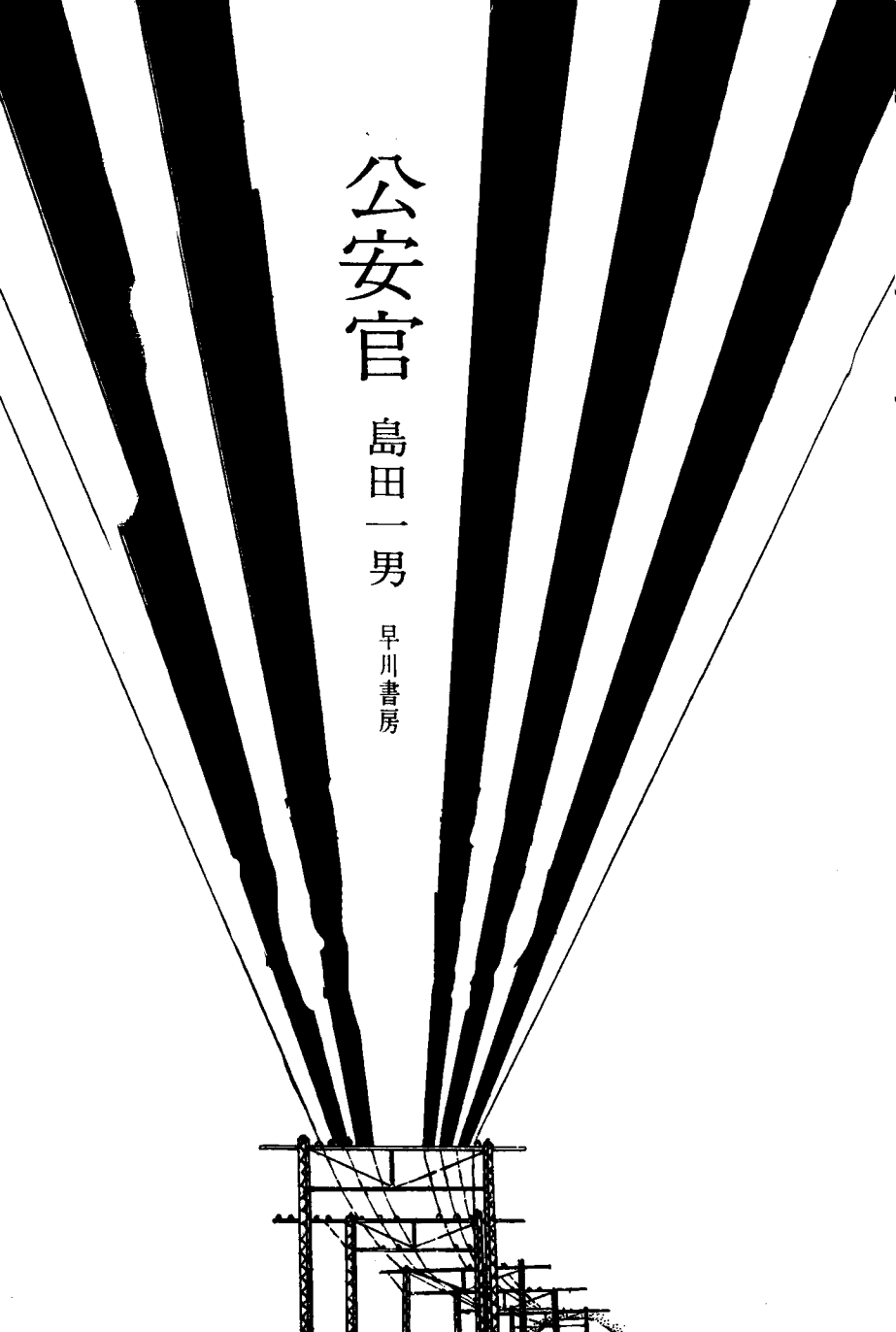
1045



公安官

島田一男

早川書房



鉄道公安官　二九〇円

昭和三十五年八月二十五日初版印刷
昭和三十五年八月三十一日初版発行

著者　島田一男
発行者　早川清
印刷者　藤巻哲士
発行所　株式会社　早川書房
東京都千代田区神田多町二ノ二
振替口座東京四七七九九
電話東京(251)〇五七六一六八〇三一八四

印刷所　日東紙工
箱表紙扉　錦印刷
製本所　横田製本

鉄道公安官

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

目次

鉄道公安官……五
環状墜道（ループ・トンネル）……九九
通票閉塞（タブレット）区間……一八三
解説……中島河太郎……二八五

箱・表紙・扉　真鍋　博

鉄道公安官

1

午前四時四十四分……。

上り急行〝出雲〟は、饐えた人いきれに、むくんだような感じの客車十四輛編成で、熱海駅へ入って来た。

――みごとな定期運転であった。

二等からふた組の男女と、三等から十人余りの男が降りた。二等の二人連れは、ひと組は中年者、ほかのひと組は新婚旅行のようであった。三等の男達は明らかに団体で、ちょいと聞きとり難い関西弁を大声で喋りながら地下道へ降りて行った。

私は、発車のベルを聞いてから、ゆっくり最後部の二等寝台車へ入って行った。――熱海から乗ったのは、私だけである。

「――どうしたんです?」

あとから乗って来た顔見知りの専務車掌江木君が小さな声でたずねた。

「仕事ですか?」

「のようなものさ……」

最近、朝早く東京に着く列車に盗難事故が多い。睡眠不足と長距離旅行で疲れ切っている旅客たちが、横浜を過ぎるとホッとした気持ちで、降りる仕度を始める。この気のゆるみの瞬間を狙って仕事をするスリ団が横行しているのである。

私は部下を五人連れて昨夜熱海で一泊した。二人の部下は、既に四時二十一分の〝伊勢〟と四時三十六分の〝大和〟に乗り込んで東京へ向った。残った三人の部下は、〝出雲〟に続く〝瀬戸〟〝明星〟〝筑紫〟に分乗する筈になっていた。

私が〝出雲〟に乗ったのは、数本の急行の中で、この列車が一番被害件数が多かったからである。〝出雲〟には、団体客が多い。出雲大社への参拝団だった。――団体客は、一般乗客よりは遙かに警戒心が薄い。周囲が、全て自分の仲間であると考え、気をゆるしている。そこに乗ぜられるようであった。

私も、手下げカバンをぶら下げて、二等寝台車の通路を通り抜けた。マロネ四一型……、左右に上下二段、二十四寝台と、前後に男女別々の休憩室を持った最新式のものである。

続く三輛が三等寝台で、二等が二輛、あと八輛は三等である。

列車は、真鶴海岸を走り続けていた。――東京――熱海間では一番景色のよいところである。が……、乗客は殆んど眠っていた。たまに起きているものも、窓の外を眺めてはいなかった。もっともよい景色を、いろいろと見ていたからであろう……。

それに、まだ、薄暗かった。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

私は、席をさがしているような恰好をして、最前部の三等車まで行った。——満員というわけではなかったが、私が腰を掛ける席はなかった。——ひとりで、二人分の席を占領しているものが多かったからである。

横になって、座席に獅噛みついている姿は、ミイラに似ていた。

——眠っているんだ。絶対に起きていないぞ……。

体の形でそう叫んでいるミイラ達……。私から、——この席あいているんですか、と声をかけられはしないかと、息を殺して緊張している。

だが、私は声をかけなかった。——私がさがしているのは、スリ団の一味なのだ。

三等車から、二等車へ移ろうとした時、列車は小田原へ入った。

私も、急いでホームへ降りると、小田原からの乗客を注意した。——スリ団は、熱海か小田原、或いは横浜から乗り込むに違いない。そう考えていたからである。

が……、駅弁を買う幾人かがホームへ飛び出して、すぐ列車へ戻っただけで、新らしい乗客はなかった。

——小田原から、急行券を買って座席のない列車に乗るなんて馬鹿げた話だ。普通電車で行っても、十分とは違わないのである……

私は、ホッとした気持ちで、生ビールのスタンドを眺めた。

——いまのところ、スリ団の一味と思われるものは乗っていない。今日は大丈夫だ……。

そんな判断から、一ぱい飲みたくなったのである。

だが、ホームのビール・スタンドは、暗かった。
五時十三分……。
発車のベルが鳴った。ここも定時だった。
私は、駅弁とジュースを買って、列車へ戻った。前が普通二等、うしろが座席指定の二等である。
――われわれは、普通二等を自ロ、指定二等を指ロと呼んでいる。ロはイロハのロ、つまり二等である。
指ロは、空席があった。――熱海で、ふた組の男女連れが降りたからであろう。
二等寝台車のボーイが、せかせかとやって来たのは、私が弁当を半分ばかり喰べた時……、列車は、大磯辺りを走っていた。
「――班長さん……」
ボーイは、低い声で、ささやくように云った――
「ちょっと、ロネへ来てくれませんか」
「お食事だが……、急ぐのかい?」
「お客がひとり、いなくなったんですよ」
私は、薄ッペラな奈良漬けを噛みしめてから、ボーイを見上げた。
「もうそろそろ、客が起きる頃だろう。洗面所か便所へ行ってるんじゃないのかい?」
「いないんですよ、どこにも……、品川で降りるから、横浜近くで起してくれと頼まれていたんです」

「気が変ったんだろ。熱海か小田原で降りたのかもしれないぜ」
が……、そう云ってから、私は、自分の言葉が間違っていることに気付いた。——私が知っている範囲では、小田原で降りた客はいなかった。
「二人連れかい？」
「ひとりですよ」
「男だね？」
「ええ……、大阪から乗ったお客です」
私は、駅弁を半分残して立ち上った。——ちょいと、膝頭のあたりが痛かった。揺れる車内を、足を踏んばって往復したからであろう。
——大阪からの乗客……。この列車は、出雲の大社仕立てである。十一時十分大社発……。大阪へは二十時七分に着く。ここで二等寝台一輛と三等寝台三輛が増結される。
従って大阪で寝台車へ入って来るお客は、大阪駅から乗った客と、それ以遠の駅から急行〝出雲〟に乗り、普通車輛で寝台車の増結を待っていた客とがあるわけである。
「その男の乗車券は？」
「大阪・東京間です。急行券も、寝台券も、大阪三越内の交通公社案内所の発売でした」
ボーイは、はっきりと答えた。
二等寝台車は、まだ静かだった。横浜を過ぎると、一様に騒々しくなることであろう。
江木車掌が、寝台のカーテンの中へ上半身をつっこみ、お尻をおっ立てていた。

二等寝台は、上段が奇数番号、下段が偶数番号である。——江木車掌が調べているのは、後部から二つ目、進行方向へ向って左側の下段であった。——寝台番号は6番である。

「——おかしいですなァ……」

江木車掌は、体を起して、首を傾げた。

「服も靴も、それから荷物もそっくり残っているんですよ」

そう云って江木車掌は溜め息をついた。——彼は、おかしい……なんて、考えていはしないのである。その表情から、もっとも不吉なことを考えているのは明らかだった。

「次ぎは、平塚だねェ」

「大磯は、もう過ぎましたか?」

「二三分前に……。通信筒を落して、沿線の捜査を手配した方がいいんじゃないかねェ」

「やっぱり、そう思いますか?」

「他に考えようがあるかね?」

江木車掌は、また溜め息をついた。——乗客の転落死……。車掌にとっても、嫌なことであろう……。

「その前に、一度、車内放送してみましょう。睡眠の妨害になるかもしれませんが、緊急の場合ですから……」

「勿論、やってみるべきだよ」

江木車掌は、痩せた肩を左右に揺りながら車掌室の方へ行った。

「男の名前はわかっているのかい？」
私は、ボーイにたずねた。
「はァ……、大久保秋郎。四十二歳で、東都工業大学の助教授。身分証明書がありました」
「厄年だねェ」
「はァ。しかし、いま時厄年なんて……」
「そうでもないさ。昔から云ってることには、何か意味があるのさ。その男を、最後に見かけたのはいつだい？」
「沼津駅に停車中ですよ。便所へ行くのを見ました。——君、横浜につく前に頼むよ……そう念を押されたんです」
「落ちたとしたらその直後だろうな」
「でも、パジャマ一枚で、ステップへ出たんでしょうか」
「車内は暑いからねェ……。大学の先生だと云ったね。学者なんて人種は、綺麗な空気を吸いたがるものなんだ……と思うね」
その時、江木車掌の遠慮がちな声が、拡声器から聞えて来た。
「——みなさま、おやすみ中恐れ入ります。東都工大の大久保先生、至急車掌室へおいで下さい……」
江木車掌は、低い声で、同じ言葉を三度繰返した。
が……、この放送は意味がなかった——。大久保助教授は、遂に姿を現わさなかったのである。

江木車掌は、止むなく、藤沢駅で通信筒を落した。更に、次ぎの大船駅に停車したとき、ホームへ出ていた助役に捜査手配を依頼した。

やがて、横浜……。

寝台車の乗客が、一斉に、あわただしく動き始めた。品川までの三十分間に、身仕度をしようというわけである。

こんな乗客の間を、ボーイは泳ぐようにして駈けずり廻っていた。

江木車掌も、十四輛の車輛を適当に歩き廻っている。

この間、私は、6号寝台に腰を降して、うまくもないたばこを吸い続けていた。

六時四十二分品川、同五十分新橋……。

「――駄目だ……」

私は、大久保助教授の遺留品をまとめることにした。

そして、終着駅東京に着いたのが六時五十五分……。

そこに、意外な報らせが待っていた。

――手配の人物を発見せず……。

沼津、小田原、大磯間の各駅・各保線区から、同じ文句の報告がホーム助役のところに集っていたのである！

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo